

## 一枚の写真

アジア学生文化協会理事長 小木曾 友

私の前に石林をバックにした一枚の写真があります。そこには今回の雲南旅行の参加者の顔が並んでいます。よく見ると、どの方も養生学のそれぞれの分野の達人で、まさに荘子の「名料理人・包丁」に、「臣が好むところのものは道なり、技よりも進めり」(ご覧いただきましたのは技ではございません。技をきわめた果てにあるものと申せましょうか、道でございます)とあるような、技を超えて道に近づきつつある方々の穏やかないい顔ばかりです。



実はこの写真は、私たちのメンバーが撮ったものではありません。大石林をバックに記念撮影をしようと並んだところ、我が方のカメラマンの両側に、二人現地のカメラマンがいて、盛んにシャッターを押しているのです。初めは何でだろうと不思議に思った程度でしたが、そのうち、「もしや」という不安な予感に変わりました。そして、その不安は、石林を巡り歩くうちに現実のものとなりました。二人の女性の売

り子が私たちのグループにぴったりと張り付いて離れないのです。もちろん、手には先ほど撮った私たちのグループ写真を何枚も持っています。

私たちは、当然彼女たちを無視して歩きつづけました。そして、彼女たちも諦めたのか、その内いなくなり、私たちもすっかり忘れてしまいました。ところが彼女たちの執念はそんな甘いものではありませんでした。私たちが昼食をとったレストランの入り口に、売り子の一人が例の写真を持ってしっかりと立ち、私たちが昼食を終わって出て来るのを今や遅しと待ち受けていたのです。(レストランの中までは入って来なかったのは、禁止されていたのか、あるいは作戦としてかえって逆効果と考えたのか)

ここに至って、彼女の「売らずば止まじ」という(実際、この写真は私たちのグループが買わなければ誰も買うはずのないものですから)背水の商魂に、さすが値切り上手、買い物上手の横澤先生もついに根負けし(横澤先生ご自身の言葉によれば「よくがんばるなあと、ホロリとしてしまった」とのことですが)、買うことになってしまったのでした。売り子たちの絶体絶命の執念の勝利でした。

この出来事に、私は別の感想を持ちました。それは、「社会主義の国」中国が、ほかのアジアの国々と同じように、本当に「市場経済の国」に移行しつつあるんだなあ、という一種の感慨のようなものでした。

9月2日、最後の夜は昆明のホテルでしたが、夕食後、反省会が行なわれました。参加者が一人づつ短い感想を述べ合い、都

倉雅代先生の番になりました。次の瞬間、あっという出来事が起こりました。下の階から幽かに聞こえてくるピアノの音に合わせて、突然、先生の即興の“舞い”が始まったのです。下の階から幽かに聞こえてくるピアノの音に合わせて、突然、先生の即興の“舞い”が始まったのです。それは地を這うような、地の底に蠢く地霊のような、“原初のいのち”のゆらめきを思わせるものでした。私にとっては、初めて見る、今回の雲南旅行の掉尾を飾るにふさわしい衝撃的な幕切れでした。

小木曾 友